



大人への階段を共に歩む

間もなく「成人の日」を迎えます。民法改正により成人年齢が18歳に引き下げられ、子どもたちにとって「大人」という言葉がより身近で、かつ切実なものとなってきた感じがします。この節目に際し、改めて「大人とは何か」、そして「親として、大人として、どう子どもに向き合うべきか」について、皆様と一緒に考えてみたいと思います。

■ そもそも「大人」とは何だろうか

かつての元服(げんぷく)の時代とは違い、現代において「大人」の定義は非常に曖昧です。年齢に達すれば自動的に大人になれるわけではありません。私たちが考える「大人」の定義。それは、「自分の足で立ち、自分の言葉に責任を持ち、かつ他者の存在を尊重できる人」ではないでしょうか。



子どもたちは今、まだまだ先であろうこの「大人の入り口」に立ち、期待と不安の入り混じった複雑な心境で未来を見つめています。私たちは、感情や欲求をコントロールし、社会の一員としての役割を果たし、自分とは異なる価値観を持つ人の立場に立って考えられる大人になりたいものです。

■ 親として、大人として、子どもにどう対峙するか

子どもが大人へと脱皮しようとする時期、私たち親や教職員は、どのような姿勢で彼らと向き合えばよいのでしょうか。大切にしたいのは、以下の3つの視点だと思っています。

1. 「教える存在」から「伴走する存在」へ

これまでは「あれをきなさい」「これはダメ」と教え導くことが親の役割でした。しかし、これからは「一人の人間として対等に接する」時間が重要になります。答えを与えるのではなく、彼らの悩みや意見を尊重し、耳を傾ける姿勢が、彼らの自覚を促します。

2. 「失敗する権利」を奪わない

大人は先が見える分、つい先回りして失敗を回避させようとしてしまいます。しかし、大人になる過程で最も必要なのは、失敗した時にどう立ち直るかという経験です。大きな事故にならないよう見守りつつも、「自分の責任で試行錯誤させる勇気」を、私たち大人の側が持ちたいものです。

3. 「背中」で語る

子どもは驚くほど大人の姿を見ています。「大人は楽しそうだ」「あんな大人になりたい」と思えるロールモデルが身近にいることは、子どもが大人になるための最大のモチベーションになります。私たち自身が、自分の仕事や生活を主体的に楽しみ、誠実に生きる姿を見せることが、何よりの教育と言えるかもしれません。

成人の日は、子どもたちの成長を祝う日であると同時に、私たち大人が「自分はどんな背中を見せているか」を振り返る日でもあります。彼らが自信を持って「大人」の仲間入りができるよう、また「早く大人になりたい」と子どもたちが思えるような社会でありたいものです。成人の日を機に、ご家庭でも「大人になること」について、ぜひゆっくり語り合ってみてください。